貝寄浦の跡　下

Ōeda, Ryuhō.
Kai zukushi ura no
Nishiki. 1791.

貝盡浦乃錦巻下

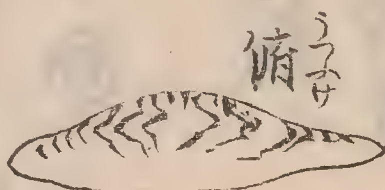
目録


SMITHSONIAN
NOV 24 1952
LIBRARY

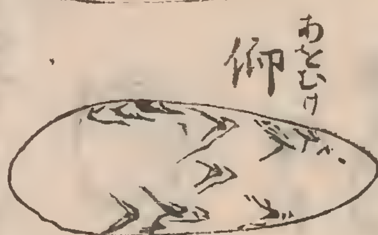
百介圖（ひやくかいのづ）

鵤介（かくぜんかい）

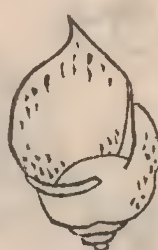
俯（うつむけ）



仰（あをむけ）



牽牛花介（あさがほかい）



綬櫻介（しだりさくらかい）



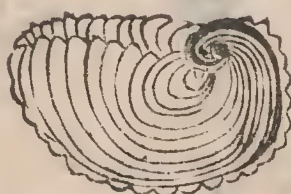
月日介（つきひかい）



相子介（もみかい）



葵介（あふひかい）



たこ舟介（かい）



駒が爪介（こまがつめかい）



鷲の爪介（わしのつめかい）



みる介（かい）



めくハおや介（かい）

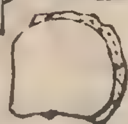


小蝶介（こてふかい）

俯



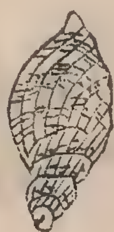
仰



蛍介（ほたるかい）



むしろ介（かい）



山燈介（やまとうろうかい）




香筯介


桔梗介





紫介


筍介


松虫介


牛角介

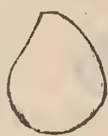

酸介


きせる介


なが巻介

曲介


巻筆介





ぬぞう介

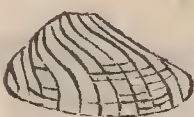

貝子



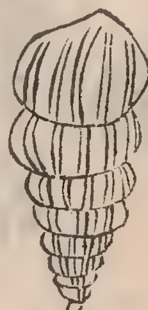
車介


姫簾介


甲介


恵介


白玉椿介

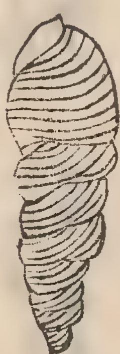

絲かけ介


くじや介



舟介

蜻蛉介


魚のごう介


刀介

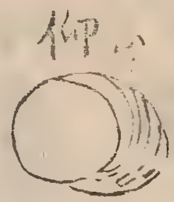

きたみ介



石[illegible]介

釜介

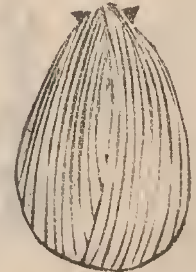
御



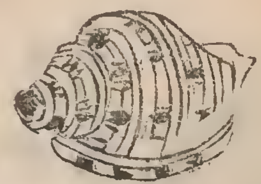
瓶介



同名石一種

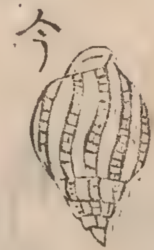


鳴戸なると介

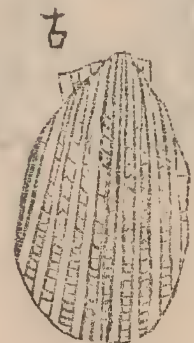


葉介

今



古



同名石一種

さゞ波介



千歳介



ぎんちう介



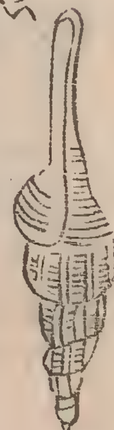
かづらお介



山椒介



長介



からかさ介



笹の露介

御

俗





口切介



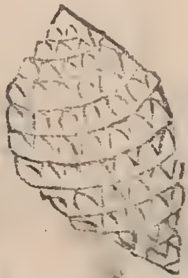
い介



猿頬介



霰介



夏桃介



かや介



女郎花介



嶋ざい介



篇笠貝



岩ふし



きらく貝





茗荷貝
此器あまた切開きたる器なり

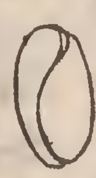
屋形貝



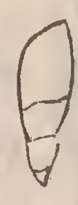
網貝



かいこ貝



麦絹貝



絹包貝



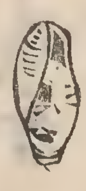
鬘貝



烏帽子貝



秋の錦貝



苔衣貝



白髭貝



雪翠貝



要貝



関守貝



紅嘴呼貝



菜摘貝



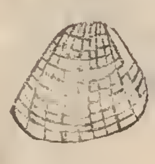
八重梅貝



桜貝



雪屋貝



蝉の羽貝



藤壷介



志かじう介



松風介



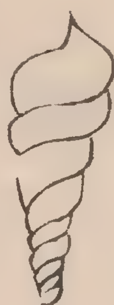
薄雲介



鶯介



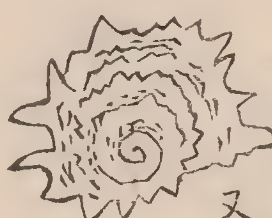
宀う捻介





椎れこ介

花筐介



又ハ鬼介とも云



玉かづら介

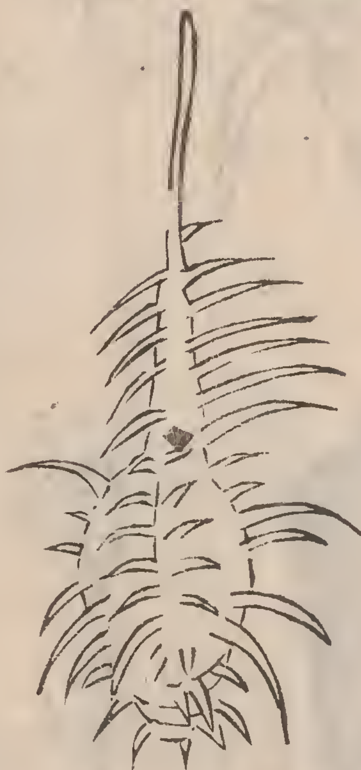
荷苞介



枕介



悪鬼介



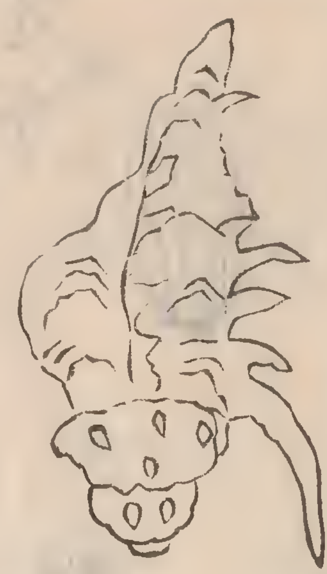
腰高かんがら介

俯



仰




鬼(おに)さゞゐ介(かい)


たいらぎ介(かい)



百貝圖に大名貝とも紅貝とも云
色介
是様介の別種

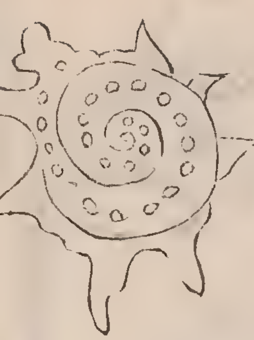
追補介圖

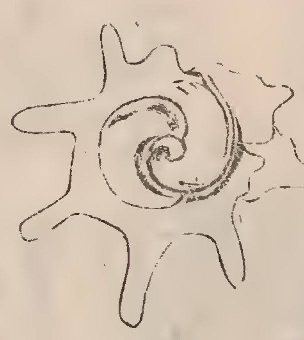


百貝圖に赤どろ貝と云
袖介
歌仙中の[illegible]別也



まどろ貝ハ中に穴あり
百貝圖に云蟹皿





片部介
角片部とも



眠貝
黒圖とも



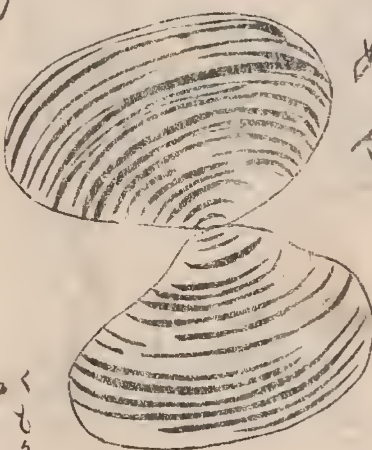
持介

中に龍穴あり
百貝ハ蜀子出





含貝
楯介とも



姫介



筆介
ねぢる介とも



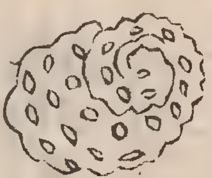
海燕
きこ西くら
まかで



榧介



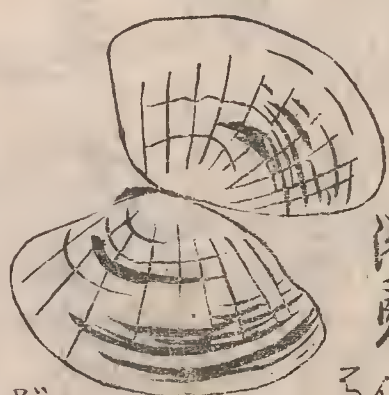
雲介



同



圓貝

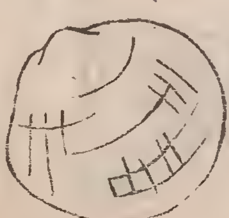


淺貝
る森貝とも

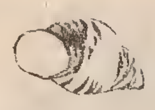
雀介の
かわり詞り
又小雀貝
とも云ふ



馬貝



泥貝とも

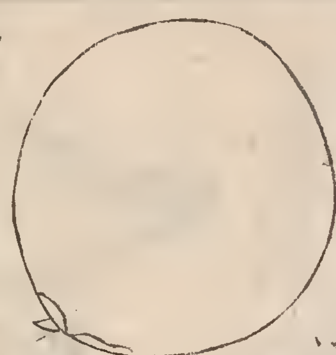


鹿子貝

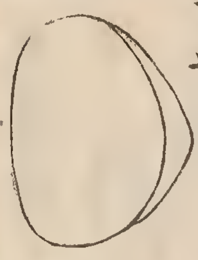


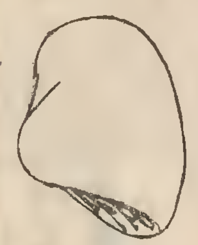
鶉貝 壺貝とも

言の葉貝 下の名なり



杓子貝 鏡貝とも 是まど貝なり中ふわかびのごとく見えなり





蓋貝





懐貝

冠貝 轡貝とも 馬珂貝とも 鯨螺とも

英足貝

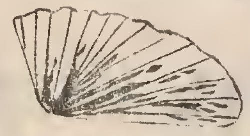


鶉貝 又尾上貝とも

落葉貝

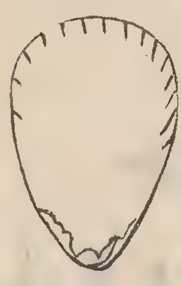
安良須貝





鷺足貝





網羅貝 臥貝とも



石陰貝

江貝 烏貝とも 絵書貝とも

塩折貝



鮫貝

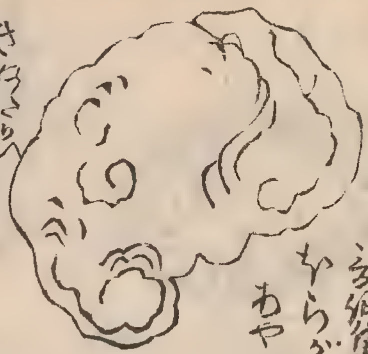


戎貝

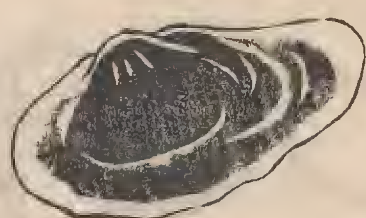
阿野貝

梭尾螺（がらがい）

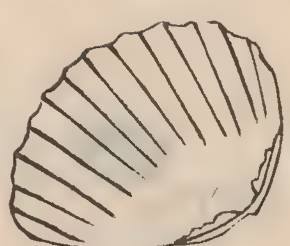
玄紀集ニハ此字を からがいと訓ずるハ あやまりなるべし

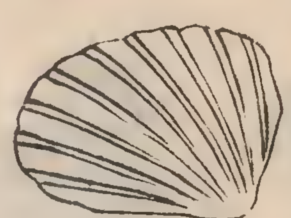


土負貝（つちおひ）



玉晃貝（たまかさき） 鳥貝（うろす）とも

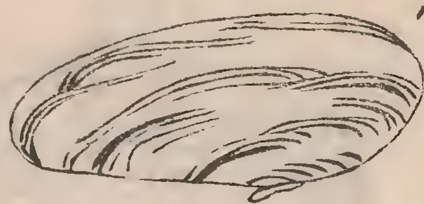




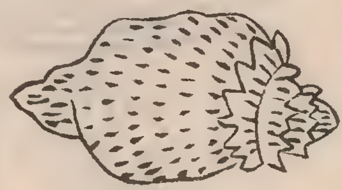
世冨貝（ふくべ）



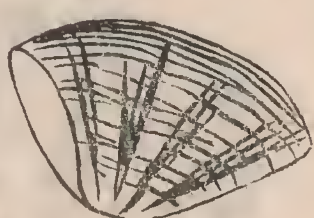
碌貝（きねさごり）



嶋螺（しまかし）



破太志貝（はたらし）



面貝（おもて）



久保貝（くぼ） 是がんがうと云ものなり



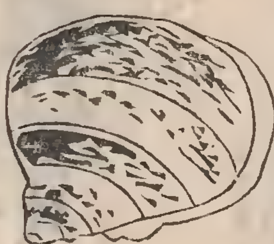
紅螺（べにし）



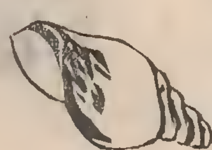
雛貝（ひなかい）



緑貝（みどり）

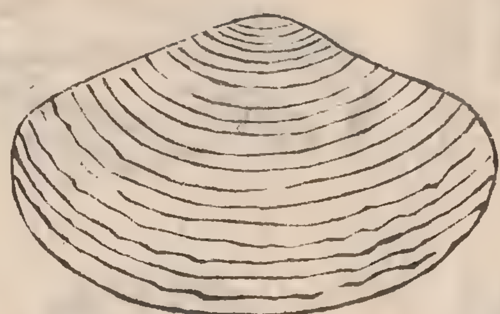


志ほがい貝



前歌仙貝之圖

簾介



志介



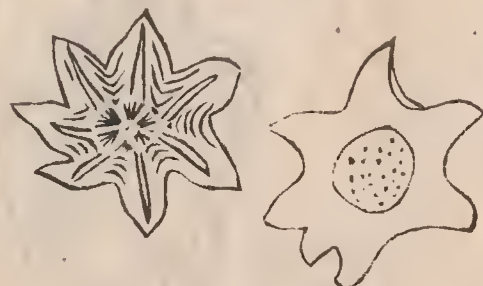
梅花介



櫻貝



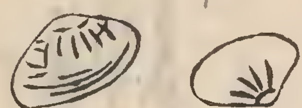
片貝



石決明介



紫貝



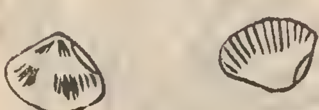
白貝



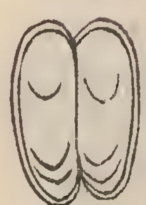
蛤貝



蜆介



海貝



馬刀介



花貝




瞿麦介



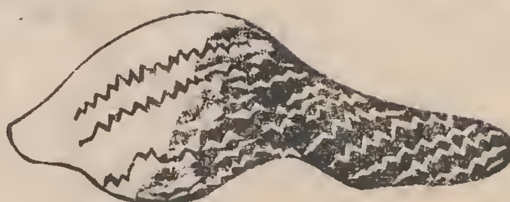

空背貝




袖貝




舩介

蜑介



浦打介



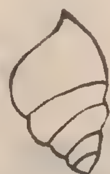

磯貝




佐々和貝




千種介

抱はら貝




津貝




烏貝（からすがい）



破貝（われがい）



雀介（すゞめがい）

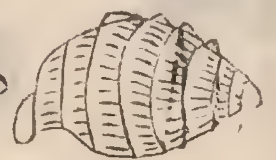


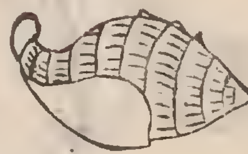


瘢介（きずがへ）



都介（みやこ）



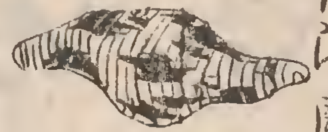


小貝（こ）





から貝（かい）



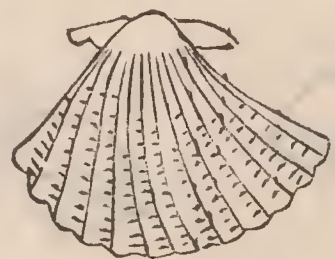


真蘇枋（ますほうみ）

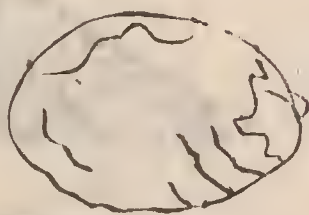




いたや貝



浪間柏貝（なみまがしはかい）





色貝（いろ）



貽介（いがい）





前歌仙三十六首和歌

簾介　左一

山家集
波かゝる吹上の濱のすだれ貝風もぞおろすいそに拾はむ

忘介　右一

後拾遺
松山のまつが浦風吹よせば拾ひて忍べ恋わすれ貝

梅花介　左二

春風に波やおりけんみちのくの籬が嶋のむめの花がい

桜介　右二

夫木　西行
春きてハいかにこのくれあま人ハまづひろふらんさくら貝をや

片介（かたしがい）　左三

いせ嶋や二見れうらのかたし貝あはで月日を待ぞ遠さなお

石決明介（あはびがい）　右三

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふあはびの貝のかたおもひして

紫介（むらさきがい）　左四

夫木
むらさきの貝よる浦乃霞潟春て波のうへ漂ふ花とこそ見ゆる

白介（しろがい）　右四

たまくしげふたらの濱れ白貝ハ夜さへ光る雪とおもへる

蛤介（はまぐりがい）　左五

今ぞしる二見の浦のはまぐりを貝おほひとぞおもひなりけり

蜆貝　右五

しつとみる陰田の沼のあら人よおきまのにいそかいでもあるべき

海夷貝　左六

江の淀ふかく拾ふ貝ちりはてなひこがきりに揺よぐも間人もなし

馬刀貝　右六

後撰　源英明

伊勢の海のはまのまてかたしらみて波のこゑなくとも

花貝　左七

天木

枝なくもつもる波のおり稀ぞやちよしよまる代の花貝

瞿麦貝　右七

天木　西行

ちぎりしむかでしこ貝にしく色はやまとなでしこ思ふ

空背貝 左八

堀河百首 師頼
とふ事はあまたれ浦のうつせ貝あはでやみぬる名をや残さん

袖貝 右八

夫木 西行
波あらふ衣のうらに袖貝をみぎはに風のたゝみをくかな

船貝 左九

夫木
こぐ人を渚にまちて舟貝はぬるくる風やはすぐなるらん

蜑貝 右九

鳴海より一苫もうち越住吉とはやしいるあまがつり舟

浦打貝 左十

夫木
田鶴さはぐ汀のそと藻をかきわけて浦打貝を拾ひつるの紀

磯貝　右十

夫木　人丸
みな底の玉よりまさる磯貝のかく恋のみぞ年は経るらく

佐々部　左十一
さゝへすむ瀬戸の岩つぼを求め出ていそしき海士の声しきりなるらん

千種貝　右十一
夫木
君が代は定めしとおける長浜に千々の貝は数もつきせじ

物あら貝　左十二
こちもとぞなれぬへははまありき浦ならん物あら貝はたくとらすなり

津貝　右十二
鴨長明
さゝめつる人はなぐさむかゝる津貝はいねよつまで江をかこつ

右十五

色貝（いろかい）

夫木　菩提院関白

汐みてば磯間をなみに色貝のうつし心て恋ふるの事

左十六

破貝（これかい）

夫木

和歌の浦にぬるきくちけれ破れ貝も拾へばかゝる又まじりぬる

右十六

瘀貝（きさかい）

与謝の海乃汐干のかたの真砂地を行けばきさ貝拾ふといふなり

越前の名所の色の濱にて
始の名にますほの小貝といふ
色の濱とハ言はれたり…十五十六十七

左十七

（こかい）

よもぬれて出てん志ほの中なる小貝拾ひ

右十七

真蘇枋貝（まそほかい）

同

志ほそむるますほの小貝ひろふとて色の濱とハいふにやあるらむ

烏介　左十三

山家集西行

浪よするしらゝの濱のからす貝拾ひやすくもおもほゆるかな

雀介　右十三

鳴よする竹のよりれ雀貝なれき世にもわひにけるかな

都介　左十四

夫木

ひとまちは遠はきこえし都の名におへる都貝をまづ拾ひぬる哉

梭尾螺　右十四

山姥のこし小袖からはつの貝ふくるをまてれ秋の夜の月

文蛤介　左十五

いさや介は文蛤の字を用ゆる事誤れり海扇の字を用へし文蛤はおさうあり

信實

あやしくもとくらはしおくるや貝ひとつ海士のなくひにかへさや

色介(いろがい)　右十五

夫木　菩提院関白

汐みてバ磯乃まなごなく色貝のうつしきこそ恋わするゝの由し

破介　左十六

夫木

和歌の浦にぬるきしほけれ花貝も拾へ行すのちよ又まじりぬる

蚶介(きさがい)　右十六

与謝の海乃汐干のかたの真砂地を行バきさ貝ひろふといふなり

山家集　西行

小介(こがい)　左十七

なにハ潟志ほひにむれて出でたらん志らゝの濱の小貝拾ひに

真蘇枋介(ますほがい)　右十七

同

志ほそむるますほの小貝ひろふとて色の濱とハいふにやあるらむ

浪間拍介　左十八

淀家
難波めがなくまがしハをるかどれ日も忘れ袖に月で中どれ難

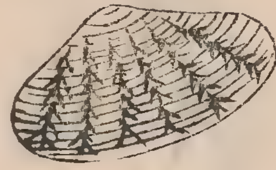
貽介　右十八

あこやと云い貝のからを拾てをきて瘡のあとをみ得るかなりけり

元禄二己巳年　林鐘上旬

右前歌仙貝歌詠人の撰集せしが志ハ孫に名を留めて志す拙
うちは此撰わきよし　後歌仙の序文に見へたり貝に附て
おふかしかるがぬし此配当も誤多し上着に評するがごとし

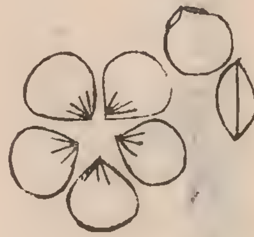
後歌仙介之圖（ごかせんかいのづ）



ちぶれ貝



ひとゝせ貝



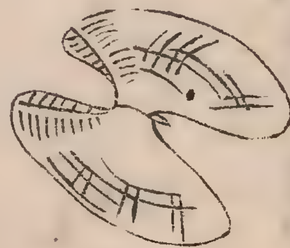
むつれ花貝



花（はな）貝



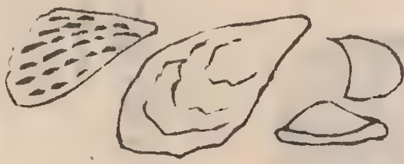
桜（さくら）貝



雨とふり貝



錦（にしき）貝



色（いろ）貝



ほら貝



都（みやこ）貝



くち打（う）貝



さゞへ貝

紫（むらさき）貝



白（しら）貝



なでしこ貝



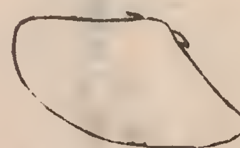
阿漕（あこき）しハ



きぬた貝



枕（まくら）貝



ちどり貝



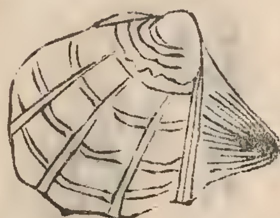
雀（すゞめ）貝



いたや貝



はこや貝



あはび貝



かくし貝



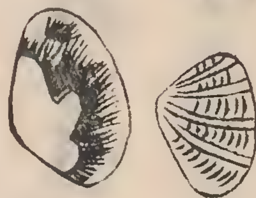
うつせ貝



むなし貝



あさり貝



赤貝



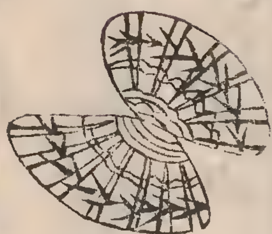
梅の花貝



かゞみ貝



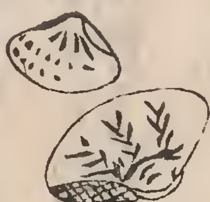
サア貝



海貝（ちぞ）



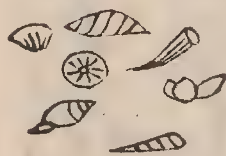
たゆぐり貝



しじみ貝



小貝（こ）



千種貝（ちくさ）



歌仙貝三十六種歌後集序

むかし歌仙貝源氏貝なんどハ此道の代より撰て袖の名さへ残ハ貝をおほふる事ハ唐のうつしをおろべき西行法師が書しけるのおとくよみしハおこやれ貝かゆり此玉をもろにしかハ今も書かると撰ける是より袖かの歌仙の数になぞらへ三十六種乃貝を詠めむといへど是ろく歌の数をそろへざるや只貝よ付る歌を歌仙貝と名付此歌仙貝は初のつる書にあ六川なり先一川は新勅撰の伊勢の国のわまの海てかくまても名ばしうるみて波のひまいづくも古道ハわまの志るしよ立てる鉄のくつうて磯菜などをつむものを

まてるといふときゝん此歌まて貝に似たく座さや
二行よハかゝる貝の歌
伊勢海の入江に藻草乃ちるひゞくにあまもかゝるの玉ハ拾ひし
わまもかゝるの玉とつげける貝の事とは書へ侍なれどもまこと
とといひゞきしかゝるを玉とみえて南との玉数がはらへのひろふ
亜名などかゝるの玉よまずふをばあつ乃の玉ろげといふなるべし
三行目はわま貝の歌
須まゝる一よとうれを住吉とはやしいかなるあつ乃ゝうらん
此歌海の名ともみえてはいふはいへるかうからん人にまよわうほなる
このかれなればいあるゝひともえてきこえ此なとやはま

貝にハ付べよろづうるさがしきをといて其ほかまりをいさんにハしうじ
四国にハきこえしの歌
わが国まふくやしなかれる人のこにハ志てみてつ吾梅ハいひつれ
此歌梅の名をかくしよめるにや　あは人れいそし花の家ふしきの
たかしき西ぞうかゞみ寄志てこといふ西行の歌なりやかすのべかりん
又川にハ身なし貝の歌
此歌あゝろえにくし嶋のいそ磯れ浦にある貝の身ハいでつるに
なりにて思ひそ此さるなどハよく見えそと思へる
六川にハ錦貝の歌
富士の絲れをえてやのすむ武蔵れをやくかいのかつ胴がなりん

此浦(このうら)ハいの中へ里とも見えねバ　志ほやぜに色(いろ)をつくしてよる貝(かい)ハ
みな花の盃と見ゆるなりけり　此浦(うら)おほよそめし拾貝(がい)よハ浜く
畫(ゑ)きぬる此貝(かい)ハ何れが中(なか)よも艶(つや)なる色(いろ)あまたのそのうちへ
拾ふもわらはさへバ此をぐひ　いとふかし

さゞれ貝　左一

山家集　西行

浪のよする吹上の浜のさゞれ貝風にもおろはいそに拾ん

うす桜貝　右一

夫木　順徳院

江川の春雨磯に浪のこぼれ貝をよせずて汐まろぶ松の声

梅花貝　左二

衛後拾　後撰

春風よ浪やおりみちぬらん末の花が島の梅乃さくら貝

花貝　右二

夫木

根ながうらのゆく浪のおく稀やちぎりよく万代の花貝

桜貝　左三

定家　建保百首

伊勢の海浪に玉よする桜貝のひかり浦のはるのいろくの妝

ますほ貝　右三

夫木

しほ染るますほの小貝ひろふとて色の濱とハいふにや有らん

錦貝　左四

三条院御製

おりまぜに色をつくしてよる貝ハにしきれ浦とみゆるなりけり

色貝　右四

名不祀

いろ〳〵の貝ありてこそ拾ハめきちくさの濱にわかのまに〳〵

から乃貝　左五

寂蓮

山姫の花浪ふ吹く浦の夕暮にそこともしらぬ貝乃上風

都貝　右五

夫木

とゝとゝれバ恋しきかるの名におへるこやて貝をまづ拾ひぬる

う打貝　左六

田鶴さはぐ芦のしほ紫をかきあげて浦よる貝をひろひつるかな

さ栄へ貝　右六

はなへもじ瀬戸の岩つゞきをとめ出ていそしきのよれぬはなる舟

紫貝　左七

夫木
むらさきの貝よる浦の藤つゝじ波れぬ人ぞ見るとみえける

白貝　右七

名寄
たれしくとまくらの濱れ白貝ハなみさへよする雪かとぞみえける

なでしこ貝　左八

夫木　西行
おしなべてなでしこ貝のよしく色ハや雨とかへるもつかしとぞおもふ

浪間(なミま)かしハ　右八

従家
難波女(なにはめ)がなくまがしハとる門(かど)田(た)も暮(くれ)袖(そで)に月(つき)やどす中ぞ稲葉

きぬた貝　左九

砧(ちき)をも越し衣(ころも)れ浦の秋(あき)かけてうつきぬたひもなかりよ

枕(まくら)貝　右九

詠　広重
紅をもるハ難波(なにわ)路(ぢ)の雨にて貝(かい)ひかる菱(ひし)にあいぞめやハ

千鳥(ちどり)貝　左十

名にちどりなきをもとめあとの浜辺ながらひかる浦(うら)にかゝハはぐりめやハ

もぢ貝　右十

詠　大江広重
忍ばする竹(たけ)の面影の権貝(ちぢめくハ)てまて紀世にもあひけり久寿かな

あやや貝 左十一

新六帖 信実

あやしくもとりつくしたる板(いた)や貝ら満かくあまのなりはひならずや

あこや貝 右十一

西行

あこやとるゐ貝(かい)のからをつみおきてたからの跡を見する也(なり)けり

あはび貝 左十二

千首 牡丹花

なべてよれ恋(こひ)ぢにいでゝうみしらんあはびの貝(かい)れおのが名(な)らひ哉

かき貝 右十二

後花園院御製

ゑ袖(そで)はいつかひるされかくし介あまてふとも浪(なみ)にまかせて

うつせ貝 左十三

續後撰集 讀人不知

浪のうつみしまの浦(うら)のうつせ貝(かい)むなしきからに我(われ)やなりなん

身(み)なし貝　右十三

高倉院入道二品親王
うき嶋(しま)の磯(いそ)まわかくるゝよする貝(かい)乃身(み)ハいつくよなかきてねまくら

あさり貝　左十四

光俊
い勢の海ハ志ほひよあさりしわかるかひもとても身(み)をバ捨(すて)し

志ほ貝　右十四

師兼
伊勢(いせ)乃海乃浦(うら)の汐貝(しほかい)拾ひてもあまりて袖(そで)のぬれまとふハの恋

梅(むめ)阿ら貝　左十五

たのもしな梅(むめ)わら貝(かい)の浮きねへよ法(のり)のちまれ浦(うら)よきし身(み)ハ

かゝみ貝　右十五

海乃記　吉明
たれはつる人(ひと)ハなきさのかゝみ貝(かい)何をねよ浮めて身(み)をそてらむ

あし貝　　左十六

津守国冬
海底やなゝふかきあし貝乃かひある国となれるかしこさ

みぞ貝　　右十六

江の底よみぞ貝ひろふよるなひ子がせはまなびに間人をぬし

さゞり貝　　左十七

西行
今ぞ志るなごされ浦のさゞりを貝あはせとぞ名なりけれ

しゞみ貝　　右十七

千首 為尹
しゞみとるかくれ浦乃かり人よさまよひはちかひぞかるがな

小貝　　左十八

源師光
いせの海さよ花濤よ駒と見てみやこの花とふ小貝ひろはん

ちくさ貝　右十八

夫木
君か代のためしとみゆる長浜に千種乃貝の数もつきせじ

右後撰歌仙貝歌綴に姓名を記せざれば撰者をしらず前歌仙乃両さきあり序中に先人乃前歌仙貝の集を臨時按ずるとあり此書の始に記を前々歌仙乃外又一集編るとみえたり六歌仙の中に洩る貝志てこゝ貝くらべし貝の歌此始に載る前々歌仙の中にかゝし余若年の時詣で河辺長流の選述し歌仙貝乃集写し置今ハ久しくなりて

遺失(いしつ)しぬるなし。按(あん)ずるに是等(これら)の集(しふ)をや
難(なん)じたるにや。あの貝(かい)にて貝は二冊ある難家(かんか)ハ
此書(このしよ)乃中(うち)の前家(ぜんか)作(さん)よりと載(の)せ待(え)ば此二家(さざき)もかすよ
ましき権(じ)がたしかなるべし。その後家(ごか)作集(さんしふ)を
用ひ書(かうじ)し、今(いま)歌仙貝(かせんかい)の集(しふ)異同(いどう)あり越えて
志かんが当もてもて小此跋(このばつ)を加(くは)ふ也

貝盖記

此戯ハ高家女児のわざにして久しく傳れり家行神主の
記にいはく其始を舊事紀に出る黒貝姫與蛤貝姫命よりして起れる
全文を考ふるにさして貝合の濫觴とすべきにあらず只其名に
より牽合附會せるなり次に景行天皇五十三年淡水門に御幸
ありて得白蛤のことを以て膾とし作れども是も只為膾而進
るのみにして貝合の起とするにあらずそれは牽合の説なり
日本紀全文を考ふるに此事貝合の證とするにたらず近来世に行る
書に此事を載て渡會直方の著に出ると記せり余が傳る所ハ
家行の作とありいづれが是なることをしらず只貝のことハ千萬





されども他の貝に不合ことを以て婦徳に比し一度嫁しては一生
他の夫にまみへざる貞女節の義に比するのミ此おしえを以て
女子の玩と翫るなり其始つまびらかならねバ作意其故あらん
まりを記して世に傳へけることを忘るゝ師よりて人々さとしなり師を
得ざる片鄙の人ハ此書に付てまびらかしを知るなりとせん
そのなりあまさずハ面授口決なくしては知がたし
先貝の数ハ三百六十ありて一年の日の數に象なり正月元日
の日おいそひそむも也まづ毛氈を二枚敷中央に奉書紙一枚
を敷貝桶出貝の方より先一荷中央へ出し後の方に並
客人の方へ向るなり夫より地貝の桶より地貝をさし出し

都合十二かいの図 閏月ハ十三なり

東

卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 子 丑 寅

頭

出貝

南

北

西

此外数ふかくいへど尤く次第く小なるしが多し

玉女きく祓と云習ひけりやゝハ何時にても其時より

九ツ目を玉女といひ三ツ目を守神の方と云なりまたハ朝の

六ツ卯の時ならバ亥の方が玉女巳の方が闕神なりこれにしく

刻々の支の方を考合出すべし此事深き秘事なり

子夜九ツ　丑夜八ツ　寅夜七ツ　卯曉六ツ　辰昼五ツ　巳昼四ツ　午昼九ツ

未昼八ツ　申昼七ツ　酉暮六ツ　戌夜五ツ　亥夜四ツ　かく心得べし

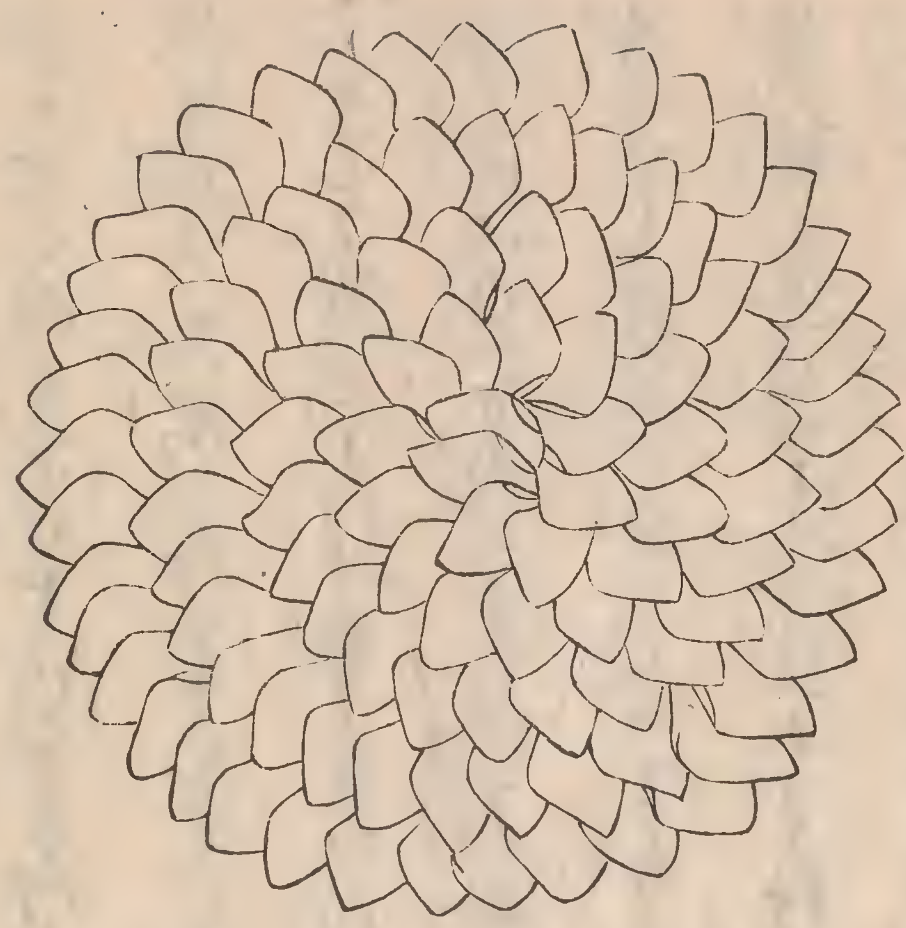
偖蓋やうハ出貝に形の似たるを取合地貝の中より選出し出貝の

頭の方を向へなし地貝を右の手のせてく下よりすくひ上ぐ

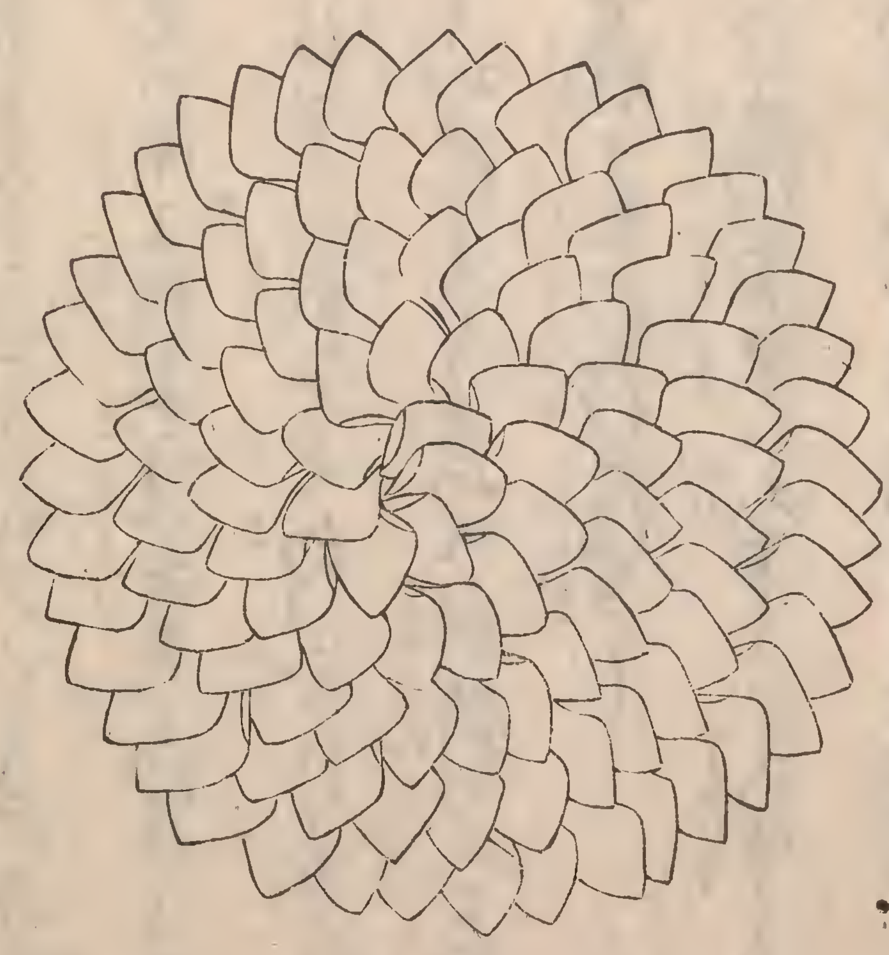
やうに取て片手にて合せ向へむけたなりあはさるが又介き人々

かくのごとし是をひらく時ハ左の手を袖に入袖ながらそへて合ハ
應し左の手を少し出しそのまゝにときしよそてあひよる貝を見る
おまをく時貝の口をとゞをのけておゆると二つにわかるゝとその平手にて
此せ捨く左右へ寄せてそくし貝の中に彩色絵をすゞかきしなり
これを合せとりし事にいはゞ此貝此形を見知り合するなり
各自記貝を用ひ遊ばゞ互に合しかくしよく手つき修練の人にならひ
用ゐべし貝数多く合せられしを勝と定む指口傳多し
貝桶に出貝と地貝と分け二つに納め座中へ入やうハ真中より
左手にまはりけまはく入ることのなりかしまし圖のごとし
地ハ右へ旋りて出ハ左へ旋るべし

地貝納様之圖



出貝納様之圖

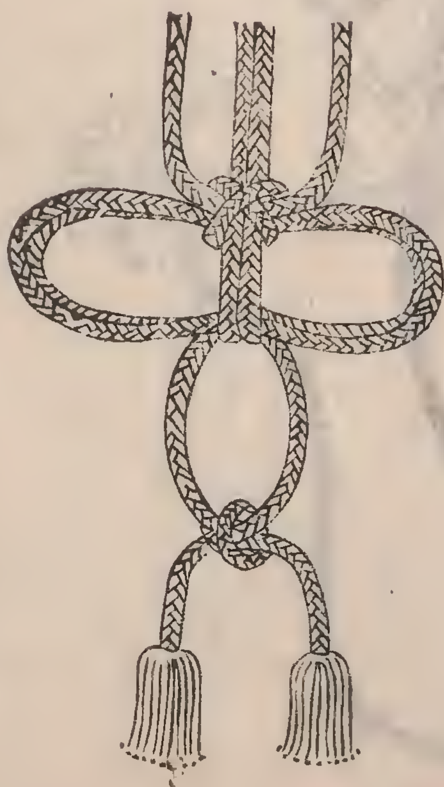


右圖のごとくめぐりたる次第にかさねかけて其上へ[illegible]
奥納をくべし貝桶蓋の上紐結びやうハ地貝桶ハ釦を

輪の方を上へなし雌えんぢうに結び残りをとゝろ結びにす
出貝桶は紐の輪の方を下へなし雄えんぢうに結ぶ残りを
叶結びにとるなり図のごとし



出貝桶雄蜻蛉結圖



地貝桶雌蜻蛉結圖

貝桶圖（かひおけのづ）



婚礼に貝桶ハ合をさばかり請取つかしかじや也合方とハ貝への
みの出き方をおへして二つよとり殺やあに右の方せ左をば
だし方といふなり古き婚礼家の書にみえたり
出貝蓋てれバ又一つ桶より出ほ次第にかくのごとくいづるを
地貝ゑゑろくゆきし跡へかへまなくびし貝をあはしてなをよふれ
やくふはくらひ過て在べし桶より貝の出し入ハ下ざ西の
女の役目なり功者の人にならするべし

大枝流芳記

貝蓋記終


朱仲
以貝經
授於琴高
圖



附錄

相貝經

漢 朱仲 著

黃帝唐堯夏禹三代之貞瑞靈奇之秘寶其有次此者貝盈尺狀如赤電黑雲謂之紫貝素質紅黑謂之朱貝青地綠文謂之綬貝黑文黃畫謂之霞貝紫愈疾朱明目綬清氣障霞伏蛆蟲雖不能延齡增壽其禦害一也復又下此者鷹喙蟬脊以逐溫去水無奇功貝大者如輪文王得大秦貝徑半尋穆王得其殼懸於觀秦穆公以遺燕鼂可以明目遠察宜玉宜金南海貝如珠礫或白駮其性寒其味甘二水毒浮貝使人寡無以近婦人黑白各半是也濯貝

使人善驚無以親童子黄唇點歯有赤駮是也雖貝使病瘧黒鼻無皮是也驕貝使胎消勿以示孕婦赤帯通脊是也慧貝使人善忘勿以近人赤熾内殼赤絡是也醬貝使童子愚女人淫有青唇赤鼻是也碧貝使童子盗背上有縷句唇是也雨則重霽則軽委貝使人志強夜行伏迷鬼狼豹百獸赤中圓是也雨則軽霽則重

緯書云師曠有禽經浮丘公有鶴經雒相畜亦有牛經馬經狗經下至蟲魚有亀經魚經唯朱仲所傳貝經悖奇是朱仲受經於琴高

右朱仲相貝經五朝小説魏晉藝術家中有之享保乙巳歳八月下浣於泉谷山中寫之

按本草綱目曰朱仲受之於琴高以遺會稽太守嚴助云云

右著述の所乃會譜二書是本艸産物を考ふの類にあらず只娯玩の書籍にそなふ余が册紀南和歌山の産なり其國好會を生ず依て幼童の時より此好玩にふけり今又擇て三餘の暇此會譜を志るす本艸綱目及び大和本草其外こゝかしこの諸書より會名多しといへども毎是食用物産乃為ゝ小池さて

琅玕ならざる類ハ是をも載せ後覧の人遺漏を罪
去難事形の類玩好の分ニ於てハ及ばざれ共示事
増益せん事を希のミ

寛延二歳三月上澣　大枝流芳記

大枝流芳先生著
雅遊漫録　全十冊　追付出来

寛延四年辛未正月本出

江戸通本町三丁目
西村源六

大坂心斎橋順慶町
渋川清右衛門

同　南新町壱丁目
伊和惣兵衛

書林

1600

